"Roger Malvin's Burial" 再考

—— Cyrus 射殺の深層 ——

野 呂 浩*

I

"Roger Malvin's Burial" は, Nathaniel Hawthorne の初期の作品で, "The Gentle Boy," や "My Kinsman, Major Molineux" などとほぼ同時期に書かれたいわゆる「地方物語」の一つである. 1931 年に *Token* 誌に発表され, 1846 年には短編集 *Mosses from an Old Manse* に収録されている.

作者 Nathaniel Hawthorne 自身が, 物語の冒頭部分で, この物語は歴史的事件である 1725 年のラヴェルの戦いに基づくものであることを記している.

> Some of the incidents contained in the following pages will be recognized, notwithstanding the substitution of fictitious names, by such as have heard, from old men's lips, the fate of the few combatants who were in a condition to retreat after "Lovell's Fight." (p. 337)[1]

Captain John Lovewell が, Paquacket 族インディアン達が, 白人の辺境開拓地を侵入するのに対抗して, 義勇兵を募り立ち上がったのは, 1725 年 5 月 9 日の歴史的事実である. 彼等は, インディアン達の待ち伏せに会い, Lovewell 等多くの者は命を落とした. そして, 数人のみが荒野に彷徨う結果となる. この史実を物語の骨格に素材として使用したとする Nathaniel Hawthorne が正しいことは多くの研究者が認めている[2].

Nathaniel Hawthorne の物語では, 熾烈窮まりないインディアンとの戦闘で, Roger Malvin とともに瀕死の重傷を負った Reuben は, なんとか戦場から逃げ延びてくれという Malvin の最後の必死の説得に負け, 間に合えば救援隊を連れてくる, さもなければ必ず埋葬に戻ることを誓ってその場を去るが, 幸いにも救援隊に助け出される. 自分達の開拓地に戻った彼は, Malvin の娘 Dorcas に, 彼女の父親の死亡を確認することなく, 置き去りにしてきたと語らず, 死後埋葬したと受けとめられるような事実とは異なる説明をしてしまう. そして, 結局, Doracs と結婚し Malvin の財産も継ぐ. しかし, 埋葬に戻る誓いも果たせなく悩み, 陰鬱な人物に変り果て, 結局, 妻と一人息子の Cyrus とともに長年住み慣れた故郷を捨てざるをえなくなる. 未開の荒野に旅立つ途中, なぜか, Malvin を遺棄したその場所に導かれる. そして, そこでカサカサという音を聞くや否やマスケット銃で狙い撃ちする. 犠牲になったのは, 自分の一人息子 Cyrus であった. Reuben は絶望し, 妻は気絶してしまう. そうすると, かつて自分の血がついたハンカチを結んでおいた樫の木の枝が柔らかな破片となって彼等と Malvin に降り注ぎ, Reuben の呪は消え, 何年ぶりかで初めて, 祈りの言葉が彼の口から天にのぼっていく劇的な終わり方をするのである.

> At that moment the withered topmost bough of the oak loosened itsef in the stilly air, and fell in soft, light fragments upon the rock, upon the leaves, upon Reuben, upon his wife and child, and upon Roger Malvin's bones. Then Reuben's heart was stricken, and the tears gushed out like water from a

*本学工学部基礎・教養 助教授
1996 年 9 月 6 日受理

rock. The vow that the wounded youth had made the blighted man had come to redeem. His sin was expiated, --- the curse was gone from him ; and in the hour when he had shed blood dearer to him than his own, a prayer, the first for years, went up to Heaven from the lips of Reuben Bourne. (p. 360)

Nathaniel Hawthorne の他の作品同様，不気味な怪しい雰囲気が漂う作品であり，彼の作品中最も難解であると言う研究者がいる程である[3]．

Reuben の問題は，Malvin を置き去りにしたこと，真実を告白しなかったこと，それに，Malvin を埋葬する誓いを果たさなかったことの3つであり，つまり，主人公の罪意識とその結末を主要テーマとした作品と片付けたくもなるが，果たしてそう言い切れるだろうか．息子を結果的に射殺してしまう場面や，物語最後のシーンなどの真相解明を含め，多くの米国文学研究者がこれまで様々な読みを試みてきた．

代表的な解釈を眺めて見ると，伝記的研究[4]，素材研究[5] の他に，宗教的解釈[6]，心理的分析[7]，道徳的，神話的解釈[8] 等がある．このような捉え方をしたくなる曖昧性が，確かに作品中に存在することを全面的に否定出来ないが，素材等を含む作品執筆の背景や，物語の展開，登場人物の心理等の変化，全体的にさらに厳密に再検討するならば，このような読みには首を傾げなくなるであろう．そこで今回の論文では，これまでの諸研究家達の見解を踏まえつつも，作品自体ならびに執筆に至る事情などを細かく再点検し，Cyrus 射殺の深層に潜む新しい解釈の可能性の有無を探るのが目的である．

II

Malvin の遺棄，妻と開拓地住民達への不真実な告白，それに Malvin との誓いの不履行等の問題を抱えた Reuben の罪意識とその結果の物語が "Roger Malvin's Burial" であると[9] 結論づけられるだろうか．

多くの戦友が死亡した戦闘から瀕死の重傷を負って，辺境開拓地に向かう敗残兵 Malvin と Reuben だが，Malvin は自分の命は2日ともたないことを知っており，自分の娘と結婚することになっている Reuben を何とか，生きて逃がすためあらゆる説得を試みる．勿論，Reuben は最初は絶体にそうしたくないと抵抗し，一緒に死を待つか，あるいは Malvin の埋葬を済ませてから去りたいと必死に頼む．そうは言っても，彼自身の命も埋葬するまでながらえるかどうか分からないことは十分承知している．Reuben からみれば父親のような年齢の Malvin が，娘の幸福のために逃げてくれと頼み，さらには自分も昔，同じような状況にあった時はあえてそこを去り，救援隊に戦友を救助させた話までして Reuben に決断させようとする．頑なに抵抗していた Reuben もそうした父親の様な Malvin の最後の懇願に心動かされ，さらには，生への執着と Dorcas との結婚を願う感情も手伝い，運よくいけば救援隊を達れてくる，もし，それが不可能な場合は，必ず埋葬するため再び同じ所に戻ることを Malvin に固く約束して足を動かすのである．Reuben の，家路へと向かう姿が見えるように，Malvin の岩に座る姿勢も変えてあげる．

このような緊迫した極限状況を眺めてみると，2人とも荒野で死に果てるのか，1人でも命をながらえる可能性の選択をするのかの，二者択一の究極場面に陥れられた2人の赤裸々な人間的葛藤が描かれていることが分かる．その場を去ってすぐに良心の痛みを覚えながら Reuben が後を振り返って見ると，Malvin は熱心に娘と Reuben の幸せを祈っているのであった．そして，Reuben も生きて助かる保証もないまま行く訳だから，たとえ生存本能，結婚願望が彼の本心であったとしても，誰でもが納得し許容しうる行動であり，作品でも彼のそのような選択を責めることは出来ないと述べられている．1人に生の望みを繋げる選択の緊迫さが2人の凄まじい問答に見事に描写される冒頭部分である．

Reuben は幸いにも救援隊に発見されて開拓地に連れ戻されて，Malvin の娘 Dorcas の手厚い介護の結果，命が助かる．

Dorcas の父親の安否を聞かれた際に真実を語

れなかった部分を検討しよう．まず，とっさの仕草は自分の顔を隠そうとすることであった．勿論これは彼の心に何らかのやましさがある証処であろう．そして，この場合は，やはり，Malvin を置き去りにすればもう2度と生きて会えないことを知りながら，自分は死にたくなく結婚もしたい故そこを去ってしまったことにわだかまりのようなものを覚えるからであろう．これを罪意識の目覚めと捉える心理学的アプローチは正しいが，同時に，真実を語ると，開拓地の住民ならびに結婚を約束した Dorcas にも理解されず，折角生還したのに，人との交わりを絶たれるもう一つの死の恐れがあることを十分承知，恐れている故の不十分な言葉の説明であることを押えなければなるまい．

父の死を告げると，予想していたこととはいえ，Dorcas は大変なショックを当然受ける．そして，かわいそうな父を埋葬してくださったのねと問われて，Reuben は出来るだけのことはしたと言って，埋葬したと受け止められてしまう．しかし，それを訂正出来ないのも同じ心的事情からである．

Malvin の埋葬に行けない事情も，Reuben の痛々しい実像を直視すればよく分かることである．彼の内面には，自分にしか聞こえない声があり，出かけて行って誓いを果たせと命じる声を聞くし，今でも Malvin が生きて待っているような気がしたりさえするのである．さらには，自分が殺人者であるかのように思い（"He at times imagined himself a murderer", p. 349)，まるで内面に住む蛇にでも嚙まれるような激しい苦痛に囚われる毎日を過ごすのである．それに，妻には父の埋葬は済んだものと理解されているから，そう簡単においそれと埋葬にも出かけられない．

このように彼特有の苦悩を見つめると，荒野での戦時体験と，一見幸せそうな辺境開拓地での日常生活との間に挟まれて呻吟する姿がよく理解出来る．つまり，Reuben が真実の告白をしなかったことをことさら問題視しているというよりは，彼がそのような選択をせざるをえない苦渋とその結果陥る耐え難い痛みをむしろ分かりやすく説明していると纏めるのが，作品内容に即した読みであろう．

III

さて，この物語のクライマックスでもあり，誰でも理解に苦しむ謎を秘める，息子 Cyrus の射殺の場面を分析しよう．一体，射殺は故意なのか，それとも偶然なのか．また，射殺される息子の正体は何なのか．

まず，息子 Cyrus はキリストの如き贖罪者であり，彼の死を通して Reuben が救われるとする Waggoner の説がある[10]．確かに名前も聖書からとられており，また，Reuben の若き姿を宿す Cyrus の射殺によって Reuben の問題が解決したとみるならば，救世主との解釈もそれなりの説得力はあろう．しかし，父親である Reuben 自身が，誤って結果的に息子を射殺し，そこに絶望的な姿で立ち尽くしていたこと，それに母親である Dorcas が気絶して，夫の誤射により殺された息子の死体に崩れ落ちる場面などはどのように説明出来るのだろうか．

Crews は，Cyrus 殺しは偶然の出来事ではないと次のように自分の論を展開している．

> In killing Cyrus he is destroying the "guilty" side of himself, and hense avenging Roger Malvin's death in an appallingly primitive way. The blood of a "father" rests on the "son," who disburdens himself of it by becoming a father and slaying his son. This is the terrible logic of Hawthome's tale.[11]

Malvin に代わって，自分の過去の姿を宿す Cyrus を殺すという驚くべき原始的な方法で Malvin の復讐を Reuben が果たすとの解釈だが，息子射殺事故の前の年には息子と二人だけで荒野に行き，一家引っ越しの準備をしているがその際には何事も起こらなかったし，さらには，先程も言及したように，誤って撃った対象が我が息子であることに気付き，妻の懸命の叫びさえ聞こえないほど絶望している Reuben を，どのように捉えるべきか．

しからば，まったくの偶発事件なのか．勿論作

品には，特に射殺の根拠が明確に説明されているわけではなく，射殺の前後関係，物語全体の脈絡から考察してその謎を解くより方法がない．まず，発砲したのはカサカサという音を聞いたときに，まるで熟練兵士の如く反射的，本能的に銃で撃ったのである．しかし，その時の心理状態は，息子であるかどうか認識するほどの冷静な精神構造でなく，夢遊病者のごとくふらふら歩いて行った延長線上での偶発性の濃厚な発砲事件であると読むしかないようなのだが．

作品の射殺場面の少し前の文章を読むと，野獣や野蛮人だけの地域に Reuben が入って行ったと説明されている．ならば，獣と捉えられていたインディアンを狙って本能的に発砲したとも言いたくなるが，別に視覚的に確認している訳ではないので断定は無理である．ただ，発砲は本能的になされたとあるし，射撃の見事さ，狙いはベテラン狙撃兵のそれであったとも付け加えられていることを見落としてはなるまい．

誤って息子を射殺する惨い結果を招く直前に，その日は Malvin を置き去りにした 5 月 12 日と同じ日であることを，妻の言葉から知り，夢遊病者のような足取りでふらふら進み，本人はまだ自覚していないが，18 年前に Malvin を遺棄した場所に導かれる．

Reuben は，枝のきしみ等の音がするたびに，思わず腕にマスケット銃を構え，四方に素早い視線を鋭く走らせるのであった．妻の父親の命日を思う発言から，過去の忘れてはならない例の体験を思い出してか，一瞬夢遊病者のような足取りになったものの，しかし，次の瞬間は，ふらふらどころか，どこにいる獲物，あるいは，敵兵でも狙い撃ちできる態勢にもどるのである．つまり，命を賭けた戦いの真っただ中にある戦闘兵士の姿である事実を読み取らなければならない．

ベテラン狙撃兵であれば，本来ならば敵か味方かを確認した後に撃つべきで，矛盾する内容ではないかと言いたくもなるが，ここでは，ちょっとした物音だけでも反射的に狙撃してしまう超過敏な Reuben の心理的状態を理解することの方が重要であろう．

従って，射殺は決して意図的ではない．意図的ではないことを偶然と言えば，偶然の範疇に入ろうが，しかし，作品の舞台背景であるインディアンとの戦いという歴史的事件を踏まえるならば，かつて置き去りにした Malvin をのみ恐れて無意識的，かつ，偶然に彼に向けて発砲しただけであるとは読めまい．勿論，作家の筆がこれまた射殺される対象として偶然かつ無意識的に Cyrus を描いてしまった訳ではなかろうから，後程もう少し詳しく検討しなければなるまい．

IV

物語の最終場面が本当に Reuben の贖罪を宣言する箇所なのかどうかを検討するためには，Cyrus 射殺前後の Reuben の姿を詳細に眺めていくのが適当であろう．

Reuben は，野獣と看做されるインディアンとの戦闘場面にいると同じ様な精神状態にあったとするならば，動く物音がしただけで発砲したとしてもそれほど不思議なことではない訳だが，まず，発砲直後の彼の様子が我々の注意を引く．明らかに命中したようで，獣ですら今わの苦痛を表わす低いうめき声が聞こえるのに，Reuben は何ら関心を示さなかった．撃った瞬間に彼を捕えたのは，弾丸を撃ちこんだ薮こそは，Malvin を 18 年前に遺棄してきた場所である事実であった．何もかも昔の通りだったが，樫の木の上部は胴枯れ病にかかり，最先端の大枝は萎びて，干からび，すっかり枯れているのを見て，震えるのであった．Reuben といえども，普通ならば，音だけで発砲はしないだろうし，たとえ，撃ったとしても命中した獲物のうめき声位は聞こえるだろうが，自分の銃を撃った地点がどんな場所かに気付き動転して，うめき声が彼の心と耳に届くような状態でなかったのである．

このほんの一瞬の大変緊迫した，銃撃場面とそれに伴う心理描写は読者を釘付けにするほどの見事さと内容の濃さである．

この銃撃の事件で物語が終わっても作品の評価には響かないような感じもするが，妻 Dorcas の様子へと場面が変わる．夫と息子が獲物を狙いに

出発した後，彼女は森の中で，夕食の準備をしていた．そして，家族の愛と家庭の幸せの精髄を描いた歌を歌っていた．しかし，野営地の近くから聞こえた突然の銃声で我に返り，激しく身を震わせたが，息子が鹿を射止めたものと思い，息子が出かけた方を見て叫んでみるが返事がない．それで，探しに自分で出かけるのであった．やがて，足下の何者かに目を奪われている夫を発見する．妻が，鹿を殺したのかと問いながら近づいても，夫はまったく気付く様子もなく，夫の顔色は幽霊のように青ざめ，激しい絶望が顔に取りついて他の表情が出来なくなったようであった．夫に，この岩は君の身内の墓石であり，君の流す涙は一度に父親と息子の上にふりかかると言われても，彼女の耳には入らず，激しい悲鳴をあげると，意識を失って亡き息子の傍らに崩れ落ちてしまうのであった．

そして，その後に続く文章が，物語締めくくりの重要な箇所で，このような内容である．妻が気絶して倒れた瞬間，昔，血のついたハンカチを結んだ樫の枝が風もないのに，幹から離れ，柔らかく軽やかな破片となって，落ち葉と，Reuben と，妻と，息子に，そして，Roger Malvin の遺骨に降り注ぐ．そうすると，Reuben は心うたれ，涙が溢れ，Malvin との誓いは果たされ，罪は贖われ，呪は晴れ，何年ぶりかで初めて，祈りの言葉が Reuben の口から天にのぼっていったとの文章が続く．

この場面もまた難解なところで，文字どおり解釈すべきかどうか．贖罪と見るかそれとも，Nathaniel Hawthorne 特有のアイロニーなのか．

息子を殺してしまい，絶望の極みにある Reuben の姿が描かれているので，自分の発砲によって残虐な結末を迎えたことは十分過ぎるほど認識している訳だから，並みの心理状態に戻っているのは分かる．妻も気絶してしまうし，そのうえ，例の枝が，破片となって舞降りるのだから，自然の埋葬現象と錯覚し，祈りたくなるのも理解出来よう．

しかし，軽やかな破片が舞降りること自体が，埋葬を意味することなのかどうか，これまた，何ら説明がない．登場人物の心理状態などを，心理学の教科書以上に詳しく描写しているかと思えば，一方，誰でもが深い関心を持つ場面などの持つ意味は敢えて説明されていない．真相は秘められているのであろう．Nathaniel Hawthorne の作品を読む読者は，曖昧性，多義性に隠されている真実を捉えるのに苦労するのが常である．

従って，最終場面の，枝が破片となって舞降りて，主人公が自分の問題は不思議な超自然的な力により解決へと導かれたと受けとめて祈る姿を文字どおり解釈すべきなのか．それとも，自分の息子を射殺し，妻をどん底の不幸に陥れてそれがどうして贖罪なのか頷くことが難しい効果をあえて狙いそのような結末にしたのか．もう少し，別な視点から吟味されなければ深層は見えない．

V

以上眺めてきたことを参考にしながら，最後に一体この物語は何を主要テーマとしている作品なのかを検証しよう．

Nathaniel Hawthorne の父親は，彼が 4 歳の時に亡くなっている．その後，母親の実兄である Robert Manning から経済的援助を受けて一家は生活してきた．Nathaniel Hawthorne はこの伯父の恩恵に感謝の念を抱くと同時に，内心は嫌っていたのではないかとして，そのような心理がこの作品に反映されているとみる見方もある．大変，興味深い説であるが，*R*oger *M*alvin と *R*obert *M*anning の最初の 2 文字がそれぞれ一致しているという貴重な指摘も含めて，なかなか実証は困難で，推測を加えた読みとなろう[12]．

また，この物語を，Reuben の罪の意識を扱ったものであり，その発生，過程，さらに結果，しかも，彼の贖罪の完成とみる解釈であるが，勿論，贖罪と看做さないことも含めて，確かに深層心理性の特徴は認めるにしても，心理を描くこと自体が狙いなのか，もう少し，作品の本題，作品執筆の背景などをもあわせて検討すべきであろう．つまり，物語の中に多少は言及されているが，物語の大前提であるインディアンとの戦いの歴史的背景を踏まえて読まないと，物語は心理的ドラマで

あるとの結論以外は導き出せなくなろう．

既に指摘済みだが，聖書との関連性も取り上げられようが，やはり，もっと，作品の内容と同時に，作品執筆の諸々の背景などをも押さえながら読まなければ秘められている深層は見えない．無理に聖書的解釈をすると，あまりにも宗教的色彩が強い，あるいは道徳的な文学作品と決めつけてしまう危険性が付きまとう．

物語の展開，登場人物の心理，射殺場面，枝が破片となって舞降りる場面，ならびに諸々の解釈などを検討したが，もう一度，作品の素材等の背景の問題を考察しよう．

この作品は1725年のインディアンとの戦争にまつわるエピソードで，「ラヴェルの戦い」に参戦し退却した兵の歴史的事実に基づくものであることは既に述べた．

Malvinが，インディアンとの戦闘で瀕死の重傷を負った厳然たる事実を軽視してはいけないだろう．インディアンとの戦いが再び始まることを予期した人々は，こぞって，Cyrusこそ，土地の指導者になることを期待していたとの説明もあり，そのCyrusが射殺されることもなにか意味ありげではないか．

父親のようなMalvinを置き去りにした体験をしたReubenは，日常世界にもどっても，その体験が彼の内面を触み，結局は，家庭の幸せも失い，誤って息子を射殺し，さらには，最終場面では，自分の呪いは消え，贖罪は完成したと解釈するような尋常な心理を逸脱した姿が作品となっているのである．勿論，生に執着するし，家庭の幸せを求め，世間の目を気にするなど，普通の神経も持ち合わせている時期，場面もあるが，簡単に纏めれば，戦時体験が彼のすべてを奪いさるドラマである．

Nathaniel Hawthorneの作家としての想像力は，瀕死のMalvinを置き去りにせざるを得ない場面，誤って息子を射殺してしまう場面の描写などに遺憾なく発揮され，本人が経験しないと分からないのではないかと思う程，迫力溢れる密度の濃い描き方をしている．Nathaniel Hawthorneが個人的にそうした場面を好むというよりは，それらに何かNathaniel Hawthorne特有のメッセージが隠されていると考えるべきだろう．このような場面は，すべて，作家一個人の想像力だけで書けるだろうか．

この作品執筆にあたり，歴史的事件を素材に使っていることも既に触れたが，Nathaniel Hawthorneは，実際には，John FarmerとJacob B. Mooreが編集した，*Collections, Topographical, Historical, and Biographical* を参考にしたことは確認されている[13]．それには，戦いで負傷して荒野に取り残されたRoger Malvin，Reuben Bourneに対応する，Lieutenant FarewellとEleazer Davisのことが細かに記録されてある．類似性を2，3挙げると，Davisは腹部を貫通する瀕死の重傷を負ったFarewellの懇願により彼を置き去りにするが，Farewellの遺骸の場所が分かるようにハンカチを木に結び付けるし，Davisが去ろうとすると，Farewellは呼び戻して，体の向きを変えてもらうなども "Roger Malvin's Burial" と酷似しており，そうした書物の内容を利用したことは間違いない．勿論，"Roger Malvin's Burial" では，ハンカチが血染めの包帯に代えられてはいるが．

このように考えてくると，作品の素材としてのみアメリカの歴史を利用し，あとは想像の産物で，歴史と作家の想像とは別物であるとの一般的な原理を適用して済ませられるだろうか．勿論，物語の大部分は，作家の想像力の産物だが，その深層に，例の歴史的事件に対する見解のようなものを全く読み取ることは出来ないものなのだろうか．

ラヴェルの戦いは，やがて，アメリカの独立神話に結び付いていくが，Nathaniel Hawthorne自身，戦いの真の動機は，開拓地を防衛することではなく，インディアンの頭皮に賭けられた賞金目当てであったことをも熟知していたようである[14]．

このように検討してくると，Reubenという人物は，特有な体験をした単なる一個人というよりは，義勇兵となって戦った経験故，結局はすべてを喪失する悲劇的な白人兵の象徴であろう．

彼の息子のCyrusが射殺されたのは，ラヴェル

の戦いの18年後の1743年であるが，この年は，再びインディアンとの戦争が始まった年であることを指摘するだけでも謎は十分に解けるのではないか．Cyrusはやがて予想されるインディアンとの戦闘でリーダーとなることを期待されていた人物なのである．こうした人物の死に際のうめき声はReubenには聞こえなくとも我々読者には，作家Nathaniel Hawthorneの，インディアンとの戦闘を再開することは自分の息子を射殺するに等しい残虐窮まりない愚であるとの悲痛な叫び声として響くのである．これこそがCyrus射殺の深層なのである．

さらには，英国の専制政治からの解放の象徴である樫の木[15]の下であらゆる悲劇的な事件が起こる．最終場面で，その重要な象徴である樫の木は，すでに胴枯れ病に蝕まれていたが，その枝が風もないのに軽やかな破片となって舞降りるのである．この場面に誠に重い意味，つまり，アメリカ性の特徴である解放性の本質が自壊する程なのだという痛烈窮まりない批判を読むのは的外れであろうか．

注

1) 小論で使用した "Roger Malvin's Burial" は，Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse* (Ohio State University Press, 1974) に所収のもの．以下，この短編に関する引用はすべてこの版からであり，頁数は，その都度，括弧に入れて示す．
2) Robert L. Gale, *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia* (Greenwood Press, 1991), p 428.
3) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Stories of Nathaniel Hawthorne* (Bostn G K Hall, 1979), p 277
4) Gloria C Enlich, Family Themes and Hawthorne's Fiction: The Tenacious Web (New Jersey: Rutgers Univ Press, 1984), pp. 113-116.
5) David S Lovejoy, "Lovewell's Fight and Hawthorne's 'Roger Malvin's Burial'," *A Casebook on the Hawthorne's Question*, ed. Agnes McNeil Donohue (New York: Thomas Y. Crowell Co, 1963), pp 89-92
6) W. R Thompson, "The Biblical Sources Hawhtorne's 'Roger Malvin's Burial'," *PMLA*, 77 (1962), pp 92-96
7) Frederick C Crews, *The Sins of the Fathers, Hawthonre's Psychological Themes* (New York Oxford Univ Press, 1970), pp 80-95
8) Hyatt H Waggoner, *Hawthorne. A Critical Study*, rev ed (Cambridge· The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1971), pp. 90-98.
9) Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne· An Introduction and Interpretation* (Holt, Rinehart and Winston, Inc, 1961), p. 31
10) Waggoner, *Hawthorne*, pp 90-98.
11) Crews, *The Sins of the Fathers*, p 88.
12) Waggoner, *Hawthorne*, p 74
13) G Harrison Orians, "The Source of Hawthorne's 'Roger Malvin's Burial'," *American Literature*, X (1938-39), pp. 313-18.
14) John Samson, "Hawthorne's Oak Trees," *American literature*, 52 (Nov. 1980), p. 459
15) Samson, pp. 458-59.